

第476回史跡めぐり 平成29年1月4日(水)

『東海七福神めぐり(品川)』

集合時間と集合場所 8:30 越谷駅東口

コース 越谷駅(8:46 急行浅草行)＝北千住駅(乗り換え3番・上野東京ライン品川行)＝品川駅(9:44)－1 品川駅創業記念碑－2 品川宿「ハツ山」口－3 問答河岸跡－4 土蔵相模跡－WC－5 一心寺(寿老人)－6 養願寺(布袋尊)－7 品川神社(大黒天、富士塚)－8 品川宿の本陣跡－9 荏原神社(恵比寿、秀作の狛犬) WC－10 品川橋－WC－11 品川寺(毘沙門天、江戸六地藏)－12 立会川の船だまり－13 浜川砲台の大砲・WC－14 泪橋(最後の別れ・越谷にも有り)－15 天祖諏訪神社(福祿寿)－WC 休憩－16 鈴ヶ森刑場跡(越谷にも有り、「六本木」)－17 磐井神社(弁財天)－WC－大森海岸駅(解散、12:30)

歩行距離 6キロメートル、帰路の交通費は780円

品川宿について

- ・鎌倉時代、品川(目黒川)河口に、品川湊(みなと)として開け、既に集落を形成していた。
- ・徳川氏が江戸に入府、五街道を整備して、東海道の品川は宿場町としての体裁を整えた。
- ・宿場の区域は、「ハツ山」口から南へ約二キロ大井村の境まで。松並木も見られていた。北から歩行新宿(かちしんしゅく)、北品川、南品川の三宿に区画、家屋は1、600軒、人口は7、000人。うち約五百人が遊女(俗称「飯盛女」めしもりおんな)だったという。
- ・東海道の東側はすぐ江戸湾(東京湾)だった。湾岸沿いに宿場が形成されていたのである。江戸から京に向かって左側、貸座敷のすぐ裏手は江戸湾であった。道路ぎわから見ると二階建てで、一階裏側は海中に柱をたて海に張り出して作られた三階建てとなっていた。
- ・遊里としても有名だった。「吉原に千丁の駕籠が入るとすると、品川にはその半分の五百丁が入った」とかつての遊里の繁栄の言い伝えが地元古老の間で見られた。
- ・また、大名行列が江戸入りを目前に、態勢を立て直すのもこの宿ならではのことであった。
- ・品川宿の通りは今でも江戸時代と同じ道幅である。
- ・品川浦は、漁業や海苔作りが盛んで、品川沖には白帆の船が見られ、鯨もやってきていた。江戸市中からの行楽の場でもあり、四季折々、はぜ釣り、船遊び、潮干狩りで賑わった。

※以下の1～17は主にインターネットからの情報をもとに記述しました。感謝致します。

1. 品川駅創業記念碑(新橋駅よりも日本一古い駅)

現在、同駅高輪口前の駐車場と歩道間の植え込みに、これにちなむ「品川駅創業記念碑」が建っている。

10月14日は、「鉄道記念日」である。1872年のこの日(当時の旧暦では明治5年9月12日)、新橋(旧汐留貨物駅)と横浜(現桜木町駅)間に日本初の鉄道が開通したとされて

いるからにはかならない。だが陸（おか）蒸気（汽車）は、それより4か月前の6月12日（旧暦5月7日）に品川と横浜間を走り始めていたことは知られていない。品川と新橋間の工事が遅れ、先に完成した区間で一足早く仮営業に入ったからである。つまりJR品川駅は、日本で一番古い鉄道の駅であり、事実上の鉄道創業地と言える。

駅は当時の宿場の人たちの反対で、最初の予定地の宿場内からかなり離れた高輪の地に造られたため、駅の所在地は宿場があった品川区ではなく、港区に含まれる。

明治五年五月七日
品川駅創業記念碑
品川横濱間鉄道開通
伴陸書
※伴陸とは大野伴陸



品川駅高輪口
読売新聞 1998年10月11日（「鉄道創業地品川駅」）

イラストは北館夫氏

2. 「八ツ山」（やつやま）口（品川宿の入口）

八ツ山は、ここより西方にあって、江戸時代に切り崩されて平地となっている。ここから品川宿の最初の徒歩新宿（かちしんしゅく）に入る。その後、北品川・南品川へと続く。

京浜急行の品川第2踏切の左側には背の高い標柱が立っていて、「従是南（これよりみなみ）品川宿 地内」「従是南 御代官築山茂左衛門支配所」と書かれている。このあたりから品川宿。



<http://blog.goo.ne.jp/tetthan/e/99cb910237428896784e4e941ccd761e> より転載↑

<http://space.geocities.jp/sharaku1028/toukaidousinagawa.jyuku.html> より➡

やっやま
◎ハツ山橋 (ゴジラの初上陸地点)

ハツ山橋は、1872年(明治5)に、新橋・横浜間の鉄道開通に際して掛けられた日本の跨線橋第一号の木造の橋であった。江戸時代には橋はなかった。

ハツ山橋(西詰)は、ゴジラの初上陸地点でもあった。ハリウッドでもリメイクされた世界的な人気を誇る日本映画「ゴジラ」。その第一作目で、太平洋上で生まれたゴジラが陸地に第一歩をしるしたのが、ハツ山橋である。



山手線の品川駅1番線ホーム(京浜急行改札口寄り)中央には、「鉄道発祥の地」と書かれたタイルがあり、そこにはゴジラのような絵が描かれている。

もんどうかし
3. 問答河岸 (三代将軍家光と沢庵和尚が問答したことから名付けられた)

寛永17年、東海寺(山手線を越えた目黒川の左岸にかつてあった寺院)に訪れた3代将軍家光を住職沢庵和尚がここに案内した時に家光は品川の海を眺めながら「海近くして東(遠)海寺とはこれいかに」と沢庵にしかけたところ、沢庵は「大軍のみを率いても将(小)軍というがごとし」と返答したと言われ、以来ここを問答河岸と呼ぶようになったという。

参考資料「問答河岸由来記」

寛永の昔、徳川三代家光将軍 勇壯活達の明君也。宗彭沢庵禅師に帰依して品川に萬松山東海寺を建つ。寺域五萬坪寺領五百石。殿閣僧房相連つて輪奐美を極む。将軍枉駕年間十数度法を聴き、政治を問う。厚遇思う可し。将軍一日天地丸に座乗し品海を渡り目黒河口に繫船して東海寺に詣で、喫茶法話、薄暮に至って江戸城に還らんとす。禅師河畔に立って是れを送る。将軍乗船に臨んで禅師に参問して曰ク海近くして如何に是れ東海寺と。禅師答而曰ク大軍を指揮して将軍と言う如しと。将軍一笑。纜を解いて而て還る。時移りて三百年地勢亦変じ河海遠し然れ共市人傳えて問答河岸と称す。一世の英主、一代の名僧、諧謔談笑の蹟。菊鮎總本店主其煙滅を惜み石に録して永世芳を傳えんとす。亦可しからずや。

昭和四十三年仲秋 衆議院議員 宇都宮徳馬書

【訳】

寛永の頃(1640年頃)、徳川三代家光将軍は勇壯で度量も大きく名君であった。家光は沢庵宗彭禅師(この頃60代後半から70代前半)に帰依し、品川に萬松山東海寺を創建して沢庵を初代住職にした。東海寺は敷地5万坪(約16万5千平米=東京ドームの約3.5倍)、寺領500石(当時上級武士で200石前後だったようなのでそれより格段に上)だった。寺の建物は大変立派で美を極めていた。将軍は年に十数度もこの寺を訪ねてきて沢庵禅師の助言を得た。いかに厚遇を与えていたかがそれからもわかるであろう。ある日、将軍が天地丸(将軍専用の船)に乗り、品川沖を経て目黒川河口に停泊して東海寺を訪れ、(沢庵禅師と)茶を飲んで話をし、夕暮れ時になって江戸城に帰ろうとした。沢庵禅師は河畔に立って将軍を見送った。将軍が乗船しようというときに、禅師に「海が近いのに、東(遠)海寺とはこれいかに」と問答を与えたので、禅師はすかさず「大軍を率いても将(小)軍というがごとし」と切り返した。将軍は笑い、停泊していた船に乗って帰って行った。それから300年の時を経て地勢も変わり、(埋め立てなどで)海や川も遠くなったけれども、巷の人々がこれを伝えて(この地を)「問答河岸」と呼んだ。一人の名君と一代の名僧がユーモアある会話を交わした地。菊鮎し総本店(北品川の老舗の寿司屋だったが、残念ながら2011年前後に閉店してしまった)の店主がその言い伝えが失われてしまうことを惜しんで石碑を建て、未永く伝えようとした。素晴らしいことだ。 htadano.tumblr.com/post/57239314880問答河岸碑

はたごや どぞうさがみ
4. 旅籠屋「土蔵相模」（英国公使館焼き討ち事件を起こすための密会場所）

旅籠屋を営む相模屋は外壁が土蔵のような海鼠（なまこ）壁だったので、土蔵相模と呼ばれていました。文久2（1862年）品川御殿山への英国公使館建設に際して、攘夷論者の高杉晋作や久坂玄瑞らは、この土蔵相模で密談をこらし、同年12月12日夜半に焼き討ちを実行しました。幕末の歴史の舞台となったところです。（解説板より）

・「土蔵相模」と英国公使館焼き討ち事件の補説

高杉らは、アジト代わりに使っていた品川宿の高級妓楼（ぎろう）「土蔵相模」にまず集合、夜陰にまぎれて、当時は攘夷論者だった長州藩の高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤俊輔（博文）、井上聞多（馨）ら十三人の志士が、御殿山（北品川四、五丁目、港区高輪四丁目付近）に新築の英国公使館（品川神社の北隣あたり）を手製の爆弾で13日にかけて焼き打ちした。



ふねだ
 ◎品川浦の舟溜まり（昔の目黒川流路〔現・八ツ山通り〕の川口付近）

ふなだ
現在の「品川浦船溜まり」



現在の釣り船、屋形船が目白押し

ふなだ
江戸湾沿いの品川宿と「品川浦船溜まり」



広重画の品川宿と品川浦船溜まり

いっしんじ
5. 一心寺（寿老人、お不動様を祀るお堂）

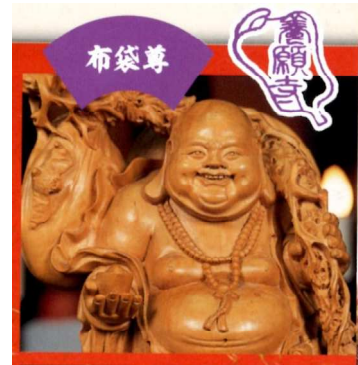
1855(安政2)年、日本海国の機運高まる中、大老・井伊直弼が開山した。昭和に入ると成田山の分身である不動明王を本尊として祀っている。

東海七福会の「東海七福神おめぐり図」より抜粋➡
 以下、七福神の姿の写真はここより抜粋



6. 養願寺 (布袋尊、品川の虚空蔵さま)

地元では「品川の虚空蔵（こくうぞう、こくぞう）様」の愛称で親しまれている。虚空蔵（こくうぞう）菩薩は、丑寅年生まれの守り本尊で江戸時代には毎月13日にお参りをしていた。今は毎年4月7日と11月7日に開帳され、七の付く日が縁日で、新馬場北口の通りには露店が出店している。13歳の子供が知恵を授かるために親に付き添われて盛装して虚空蔵菩薩にお参りをする十三詣りが行われる。お参りをするると知恵を授けてくれる虚空蔵尊である。



◎虚空蔵横丁

東海道の一心寺から養願寺（虚空蔵様）へ入る横丁の道。

7. 品川神社 (大黒天、富士塚)

境内にある富士塚は、富士信仰の集団である富士講の人々が、富士山の遥拝（ようはい）場所として、あるいは実際に富士山への登山ができない講員（講中の構成員）のために造った富士山をまねた築山（つきやま）である。

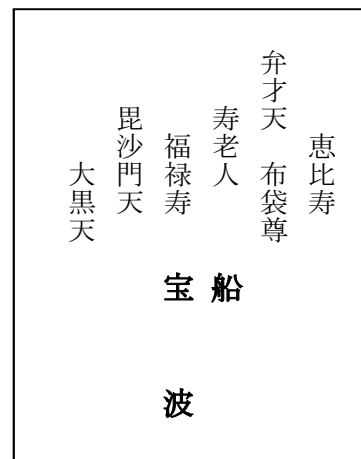


◎品川神社富士塚山開き (品川丸嘉講社、品川区指定無形民俗文化財)

毎年七月一日に近い日曜日に、講員一同が白装束（しろしょうぞく）で浅間神社神前で「拝（おが）み」を行う。その後、はだしで富士塚に登り、山頂の遥拝所（ようはいじょ）や小御嶽（こみたけ）の祠（ほこら）でも「拝み」をして下山し、社殿にもどってから平服に着替える。かつては盛んだった行事であるが、現在も行っている富士講はたいへん少ない。

(平成二十三年三月三十一日 品川区教育委員会)

品川神社にある宝船に乗る七福神



8. 品川宿本陣跡（聖蹟公園）

江戸時代の本陣は、宿場で大名や旗本、公家などが休息や宿泊するところである。大名などが宿泊すると、本陣には大名の名を記した関札（せきふだ）を立て、紋の入った幕をめぐるした。明治維新後、京都から江戸へ向かった明治天皇の宿舎である行在所（あんざいしょ）にもなったところでもある。



9. 荏原神社（^{えばら}恵比寿、秀作の狛犬）

- ・荏原神社の「荏原」は品川区西部の地名であり、さらに荏原郡（品川区、目黒区、大田区を含む地域）の一部でもある「荏原」より由来している。

◎かつての目黒川

日本橋から東海道を上り、目黒川を渡ると南品川宿に入る。品川宿を南北にわけていた目黒川は、大正時代末頃まで大きく蛇行し、荏原神社の北側を流れていた。そのために荏原神社は南品川宿に含まれた。東海道から神社への道を天王横町といい、今の鳥居の向きから往時が推定できる。現在の目黒川は荏原神社の南側に流れている。

- ・荏原神社の秀作の狛犬
一説に「日本一美しい」と言われている。



《参考》北の天王様てんのう（盛大な神輿渡御みこしとぎよ）と南の天王様てんのう（神輿が海に入る珍しい海中渡御）

品川神社は、北品川地区の鎮守で「北の天王様」といわれている。それに対して南品川地区の鎮守である荏原神社を「南の天王様」と呼んでいる。

この地域は昔から祭礼が盛んに行なわれ、北・南の天王祭は今でも続けられ、品川神社、荏原神社ともに六月初旬の日曜日を中心に盛大に行なわれている。

目黒川は現在では荏原神社の南側を流れているが、往時は荏原神社の北側を流れていたの
で「南品川宿の鎮守」であり、現在も南品川地区の鎮守といえる。

荏原神社の天王祭のいきさつは、天王洲沖で神面をつけた神輿が海に入る「御神面海中渡御」が行われる。これは、宝暦元年6月、品川沖の海面から牛頭天王の面が発見されたことに因むものである。「天王洲」の地名はこのことによるものである。天王洲は埋め立てにより現在は陸地になっており、当社の氏子地域になっている。牛頭天王（須佐男之尊）が水神であることから、参加者を河童になぞらえ、「かっぱ祭」と俗称されている。

10. 品川橋しながわばし（北品川と南品川との境）

北品川と南品川の境を流れる目黒川に品川橋が架かっている。品川宿はここを境として、北品川宿と南品川宿に分かれていた。江戸時代には「境橋」と呼ばれたり、また別に「行合橋（ゆきあいばし）」「中の橋」とも呼ばれたりしていた。

現在、橋は昔風に整備されていて、中程には東屋やベンチも設置されている。

◎俗称「百足河岸」むかでかし（北品川より品川橋を渡った左手の川沿い）

江戸時代、品川領の村々では、年貢米を目黒川や陸路を使ってこの河岸まで運び、幕府の浅草御蔵に送っていた。この「南品川宿河岸」のことを俗に百足河岸と呼んでいた。

百足河岸と呼んだのは、南品川宿河岸のそばに百足屋という大きな旅籠屋があったから。

◎ジュネーブ平和通り

品川区と友好都市を結んだジュネーブ市（スイス）から由来。

◎青物横丁（かつての青物市場の名残）

江戸時代、品川寺の門前町屋・東海道に面したあたりに青物市場があったので「青物横丁」と呼ばれた横丁があった。明治10年に市場として認可され、営業されていた。



11. 品川寺ほんせんじ（毘沙門天、江戸六地藏）

門から入ってすぐ左側に大きな「銅造地藏菩薩坐像」がある。「江戸六地藏」の一つである。

「江戸六地藏」は、江戸時代に深川に住む地蔵坊正元じょうげんによって江戸の町の中の六ヶ所に設置された。このお地蔵様の全身には、お地蔵様を作るために募金した多くの人々の名前がいたるところにびっしりと刻まれている。仏さまは背の高さが丈六じょうろく（一丈六尺、約4メートル80cm）で、全身が金色で輝いているとされるが、このお地蔵様も丈六仏じょうろくぶつで、本来は金箔が全身に施されていた。



なお、江戸六地藏は江戸の六ヶ所の出入りに設置されたとされる俗説があるが、誤り。

- | | | |
|------|-----------------|------------------------|
| 一番札所 | 品川の品川寺（ほんせんじ） | 東海道筋 |
| 二番札所 | 新宿の太宗寺（たいそうじ） | 奥州街道筋 |
| 三番札所 | 巣鴨の眞性寺（しんしょうじ） | 甲州街道筋 |
| 四番札所 | 浅草山谷の東禅寺（とうぜんじ） | 中山道筋 |
| 五番札所 | 深川の霊巖寺（れいがんじ） | 地蔵坊正元が住む地元深川、水戸街道とは無関係 |
| 六番札所 | 深川の永代寺（えいたいじ） | 地蔵坊正元が住む地元深川、千葉街道とは無関係 |

◎品川寺のイチヨウ（品川区指定天然記念物）

本樹は幹周り 5.35m、樹高 25m、推定樹齢約 600 年という古木であるが、整然とした樹姿を見せ、その樹勢も極めて旺盛であり、幹や大枝からは、多くの乳（ちち）が垂れている。本区内の数あるイチヨウのなかでも、ひときわ目立つ存在であり、かなり離れた地点からも眺めることができ、壮観である。また約 600 年という樹齢は、本寺が歴史の古い寺であることを実証するもののひとつである。（品川区教育委員会）

12. 立会川たちあいかわ（現・勝島運河）の船溜まり

屋形舟や釣り舟が繫留され、船着き場がみられる船溜まりである。ここにみられる堤防は、台風のとときの高潮や地震のとときの津波によっておこる水害から守るために作られた。

◎浜川砲台跡

浜川橋の袂から立会川が海に注ぐ所（丁度この辺り）までが、土佐藩抱屋敷（かかえやしき）であった。幕府への「指出（さしだし）」によると 869 坪が抱え屋敷の広さである。「抱」とは拝領と異なり買い入れ、借用していたものである。ここは土佐から送られて来る物資の荷揚げ地であり、立会川から荷を陸上に上げていた。

ペリー来航の嘉永 6 年（1853）、土佐藩は砲台築造の



「願(ねがい)」を幕府に提出し許可を得て、翌年、砲台を造った。「浜川砲台」といわれた。砂浜のやわらかい土地を、石、土砂で埋め立て、2300 坪に拡大させている。砲台は8門を設置していた。警備陣は品川下(しも)屋敷を宿所として、この砲台に配置されていた。浜川砲台と品川下屋敷を結ぶ連絡路は、現在の「立会川商店街」の道路であり、その距離、約200mである。若き日の坂本龍馬も警備陣に加わっており、この道を毎日歩いていた。

(以上「若き龍馬の足音」の解説版より)

他の藩では丸太を大砲らしく見せた偽物もあった中で、土佐藩の装備は江戸っ子の評判が大変よかったという。

14. 泪橋 (正式名は「浜川橋」)

浜川橋

立会川が海に注ぐこの辺りの地名の浜川から名付けられたこの橋は、またの名を「涙橋」ともいいます。この橋が架けられたのは、徳川家康が江戸入府後の1600年頃と思われます。現在の橋は、昭和9年(1934)に架け替えられたものです。

涙橋の由来

慶安4年(1651)、品川にお仕置場(鈴ヶ森刑場)が設けられました。ここで処刑される罪人は、裸馬に乗せられて江戸府内から刑場に護送されてきました。この時、親族らがひそかに見送りにきて、この橋で共に涙を流しながら別れたということから、「涙橋」と呼ばれるようになりました。

平成十三年三月三十日 品川区教育委員会

泪橋は、歌舞伎や小説にもしばしば登場する橋である。

なお、越谷にも同様に「泪橋」と呼ばれた橋があった。

15. 天祖諏訪神社 (福祿寿)

昭和40年に天祖神社と諏訪神社を合祀した神社である。旧東海道沿いに立会川を挟んで並んで鎮座していた天祖神社(南浜川地区の鎮守)と諏訪神社(北浜川地区の鎮守)が合祀してできた。ここで行われる「海苔祭」はかつて海苔漁で栄えた浜川地区の歴史を今に伝えている。

天祖諏訪神社の入口には「天祖神社」と書かれた石柱があるが、これは合祀以前からあったものである。



◎競馬場通り

大井競馬場に通じる道である。

16. 鈴ヶ森刑場跡

都旧跡 鈴ヶ森遺跡

寛政11年(1799)の大井村「村方明細書上」の写によると、慶安4年(1651)に開設された御仕置場で、東海道に面しており、規模は元禄8年(1695)に実施された検地では、間口40間(74m)、奥行9間(16.2m)であったという。歌舞伎の舞台でおなじみのひげ題目を刻んだ石碑は、元禄6年(1693)池上本門寺日顛の記した題目供養碑で、処刑者の供養のために建てられたものである。大径寺改題には、火あぶりや、はりつけに使用したという岩石が残っている。ここで処刑された者のうち、丸橋忠弥、天一坊、白井権八、八百屋お七、白木屋お駒などは演劇などによってよく知られている。江戸刑制史上、小塚原とともに重要な遺跡である。(東京都教育委員会)

東京都史蹟 鈴ヶ森刑場遺跡

当地は、東海道に面し、慶安4年(1651)江戸幕府により設けられた。「鈴ヶ森刑場」遺跡で、歌舞伎や講談に登場する、丸橋忠弥・平井権八・八百屋お七等の処刑地として有名である。境内には、処刑に使用された台石や井戸、供養塔が点在し、東京都史蹟として、品川百景にも指定される江戸刑制史上重要な文化遺跡となっている。(鈴ヶ森史跡保存会)

なお、越谷の地にも、江戸時代に刑場(六本木お仕置き場)と泪橋があった。

17. 磐井神社(弁財天)

磐井神社は、平安時代後期に編纂された「延喜式」に記載されている古社で、武州の総社八幡宮に定められていた神社といわれている。

江戸時代に復興し、鈴森(すずがもり)八幡宮などとも称され崇敬を集めていた。

なお、境内には弁天池が見られる。



◎磐井神社の鈴石と烏石

鈴石は、社伝によれば、延暦年間(七八二~八〇六)に武蔵国の国司であった石川氏が奉納した神功皇后ゆかりの石とされる。これを打つと鈴のような音がしたことから、「鈴ヶ森」の地名の由来となったと伝えられる。

また、烏石は、鳥の模様が浮き出た自然石で、江戸時代の書家、松下烏石(まつしたうせき)(?~一七七九)が寄進した。鈴石・烏石は、ともに屋内に保管されている。

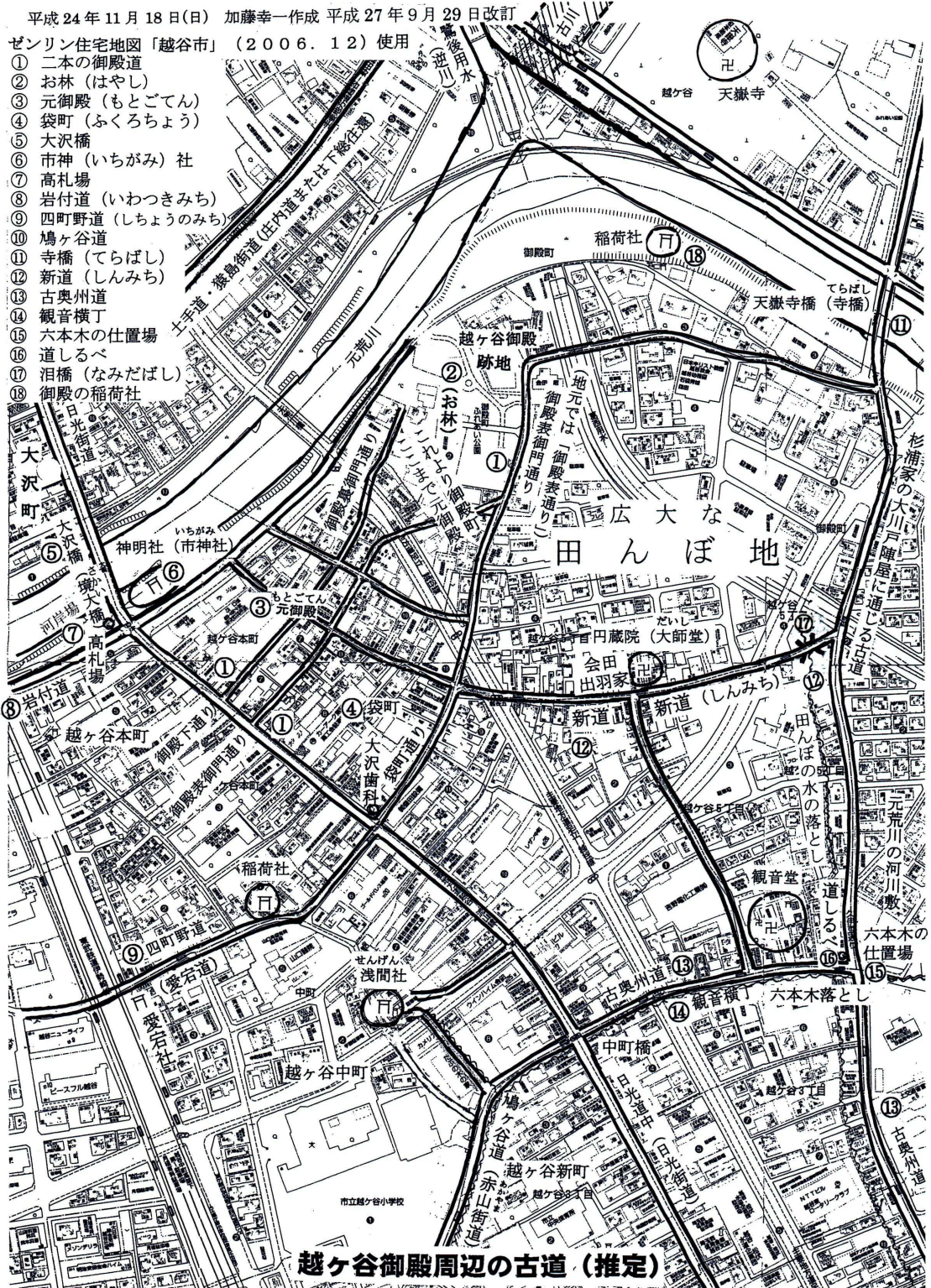
(後略)

大田区教育委員会

越ヶ谷の刑場「六本木」⑮と泪橋⑰

⑮六本木の仕置場・・・ここで見せしめや処刑が行われた。斬首した刀は元荒川で洗った？

⑰泪橋・・・六本木の仕置場と関係していて罪人とその家族が涙を流して別れを告げた。



水爆大怪獣映画 「ゴジラ」

(昭和 29 年)



初上陸地：ハツ山橋

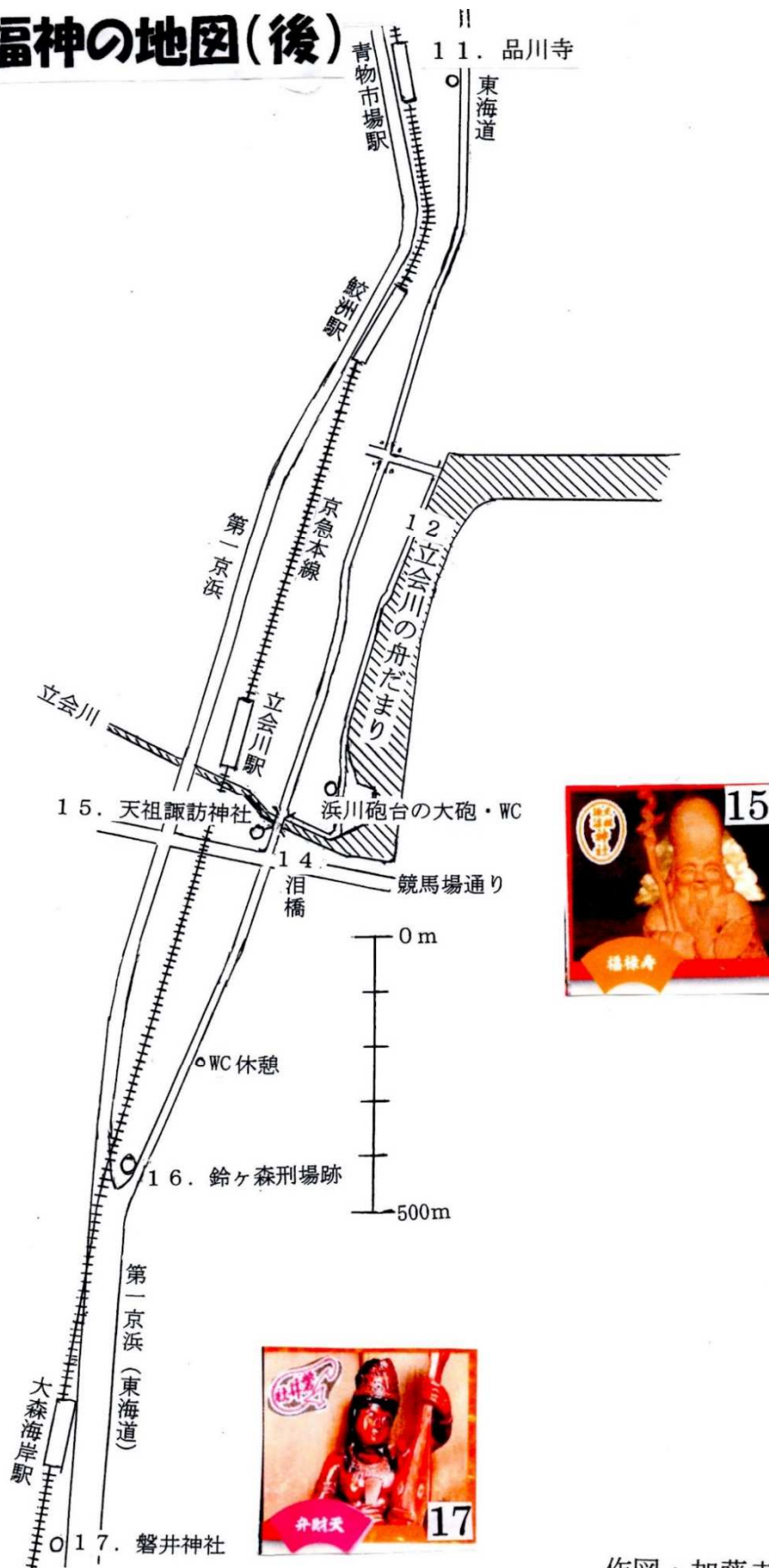
ゴジラが、化学兵器か、驚異の戦慄の一大攻防戦！
放射線を吐く大怪獣の脅威は日本全土を恐怖のドン底に叩き込んだ！

ja.wikipedia.org/wiki/ゴジラよりポスターを取得し、その周囲に加筆する。加藤幸一

東海七福神の地図(前)



東海七福神の地図(後)



作図：加藤幸一